

# 資料から見る大嘗祭

(簡約版)

國學院大學学術資料センター

## 皇位継承に関する儀礼

天皇の代替わりに際して古代から行われる儀式には、主に「踐祚」<sup>せんそく</sup>、「即位儀」<sup>たいていぎ</sup>、そして「大嘗祭」<sup>たいじょうさい</sup>がある。「踐祚」とは皇位を承継ぐことを意味し、古くから皇位を象徴する神器の継承が行われた（現・剣璽等承継の儀）。「即位儀」（現・即位礼正殿の儀）とは皇位の継承を広く天下に公示する儀式である。

そして「大嘗祭」とは、即位した天皇が皇室の祖先神である天照大神に新穀を中心とする神饌（神の食事）を初めて奉り、自らも召し上がる祭祀である。これは即位儀の後の11月の2度目の卯日に行われてきた。毎年同日に行われる新嘗祭（現在は11月23日）を大規模な形式で行うものである。

## 大嘗祭の歴史

一代一度の大嘗祭は、7世紀末の天武・持統天皇の時代に成立した。平安時代には基本的な形式が確立し、古代・中世にわたり、大幅な変更なく行われ続けた。応仁の乱以降に約220年中絶したものの、江戸時代中期に再興され、元文3（1738）年の桜町天皇の大嘗祭からは、現在まで途切れることなく行われている。

## 新穀の準備と神殿

大嘗祭の概要を、古代の資料から見ていきたい。

天皇が奉る神饌の新穀は、全国から亀卜（亀甲を用いて行う占い）により選ばれた2つの地方の田で収穫する。両地方はそれぞれ「悠紀国」・「主基国」と呼ばれ、その占いはおよそ旧暦4月頃に行われる例が多かった。

秋の収穫が近づくと、両地方の中から収穫を行う田んぼを占いで定める。旧暦9月には、地元で選ばれた人々が新穀を収穫し、都まで運んだ。

大嘗祭の神事は、その時だけのために新設された「大嘗宮」という特別な祭場で行われる。古くは両地方の人々が、神事の7日前から5日かけて建造し、大嘗祭が終了するとただちに取り壊すことになっていた。大嘗宮は「悠紀殿」と「主基殿」という2つの神殿を中心とする左右対称の祭場である。それぞれ悠紀国の稲は悠紀殿で、主基国の稲は主基殿で奉られた。

天皇による神事が行われるのは2つの神殿の内陣（奥側）であり、その中央には衾（寝具）を置いた神座が敷かれた。また

中央の神座の東側には、天皇の御座が伊勢神宮のある東南向き（京都で行われる場合）に敷かれる。さらに御座の正面には神饌を供えるためのもう1つの神座が敷かれた。

## 大嘗祭当日の流れ

大嘗祭当日の午後8時頃、天皇はまず控えの場である廻立殿に入る。そこで神事に備えて潔斎（湯あみ）を行い、白絹の祭服に着替えて悠紀殿に向かうのである。

午後9時頃になると、神饌が膳屋（神饌を調理する施設）から悠紀殿に運ばれ、神事が始まる。天皇が御手水を行った後、まず御前の敷物に窪手という柏の葉でできた箱型の容器に納められた神饌が次々と並べられた。その神饌を天皇が自ら御箸を執り、同じく柏の葉でできた枚手という平皿に盛り付ける。これを女官に渡し、女官がこれをお供えしていく。この基本的な作法を神事中に何度も繰り返すのである。神饌には米と粟の新穀の御飯の他、海産物（アワビ・鯛など）を調理した神饌や、果物、御酒などがあつた。神饌を供え終えると、天皇は自らも御飯と御酒を慎んで召し上がる。お供えした神饌が撤去されるのは午後10時頃であった。

廻立殿に戻った天皇は、次の主基殿での神事に向けて再び潔斎し、新たな祭服に着替える。翌午前3時頃より、主基殿では悠紀殿での神事と全く同様の作法で神事が行われる。大嘗祭の中核は、このように日をまたいで2度行われる丁重な神饌の供進にあつたのである。

神事を終えると、その日から3日間かけて節会（国家の饗宴）が催される。これは神事を終えた天皇が、参列者とともに新穀を召し上がり、大嘗祭の無事な斎行に対して祝賀を受けるものであつた。

## 大嘗祭の目的

大嘗宮において、天皇は中央の神座には全く触れない。終始一貫して御座に着座し、東南を向いて作法を行うのである。これは天皇が伊勢に鎮座する天照大神に対して、遠く宮中（京都）から遙拝し、神饌を供えることを意味していた。天皇の御代始めに皇祖神を祭り、国内の平安や豊穰を祈ることが、大嘗祭の最も重要な趣旨であつたと言える。